

児童詩の世界―『コボたち詩集』の場合―

大 沢 正 善

The World of Pupil's Poems : A Case of *Kobo-tachi Poetry*

Masayoshi OOSAWA

Kobo-tachi (kids) poetry concurs, a contest of poems by pupils, has been held in Gifu Prefecture since 1976. *Kobo-tachi Poetry* contains 212 poems selected from those applied to the contest. In this paper, how the pupils in Gifu Prefecture feel and think and how they express what they feel and think are examined.

On a national level, the themes of the pupils' poems in Gifu Prefecture are on their families more often and scarcely mention their dreams. This is because the pupils in Gifu Prefecture find their identities through their surroundings, and so their dreams are connected with their families and the climate they live in. This paper also examines the development of the pupils' thoughts and linguistic expression through the poems in *Kobo-tachi Poetry* arranged in order of their school years.

Keywords: pupils' poems, *Kobo-tachi*, Gifu prefecture, climate identity

子どもの言葉の発達の様相を知るために、あるいはその発達を促すために児童詩というジャンルは有用である。「児童詩とは児童が書いた詩である」と定義され、「この場合「児童」というのは小・中学校の子どもをさしていて、(略)学校教育でなされているという一定の条件があることによって、詩の本質をふくんでいると同時に、それには教育としての性格意味価値が付加されてとらえられるものである。」(『児童詩教育事典^①』と補足されている。『小学校詩の本^②』や『おひさまのかけら^③』に掲載された、全国の子どもの児童詩については拙稿で考察したが、それを踏まえつつ、固有の風土の中における児童詩についても考察するために、岐阜県の児童詩を集めた『コボたち詩集』に注目した。

『コボたち詩集』は、「コボたちつづり方教室」の編集発行により、すでに三冊が刊行されている。「コボたちつづり方教室」は、「岐阜児童文学研究会」の編集発行で児童文学雑誌『コボたち』が創刊(一九七二・七)され、その誌上に第二回「コボたち詩コンクール」の結果が掲載(一九七六・一)されたのを機に結成され、「作文コンクール」(第一回発表、一九七九・四)の運営にも携わった。その後『コボたち』は二五八号で休刊(一九九四・三)したが、詩コンクールの方は「朝日新聞」岐阜地方版に掲載されることになり、今日まで続いている。例年、十一月に県内の小学校に募集し、十二月に千数百点の応募作から数点の特選を発表し、以後随時、入選と佳作の作品を岐阜版に掲載している。第三冊の「あとがき」には、「第十回コンクールまでの詩は『コボたち詩集』として一九八六年に出版されました。／二〇〇九年には、その後の特選作品や資料を載せた『コボたち詩集2』を発行しました。この本は資料集的な内容だったので、次は子ども達も読みやすく、先生達の指導の参考にもなるような詩集を作ろうという気運が高まりました。そして、第十一回コンクールからの作品を集大成し、今回の発行に至ることができ

ました。」と記されている。以下、第一冊（一九八六・六、八十九編）と第三冊（二〇一四・一一、百二十三編）に掲載された作品（二二一篇）を主な対象とし、『コボたち詩集』を総称として、第一冊をA、第三冊をBと記す。ABでは作者名は明記されているが、引用の際には基本的に作者名はふせ、学年と性別を付記した。末尾に全作品の一覧（資料1）を掲げた。

一、『コボたち詩集』に見る言葉の発達

『コボたち詩集』ABは岐阜県の小学生の詩を集めているが、もちろん全国の子どもと同様な言葉の世界を展開している。まず、子どもの思考と言葉の発達を概観しておく。J・ピアジェは子どもの思考の発達について、感覚―運動期（〇～二才頃）、前操作期（二～六才頃）、具体的操作期（七～十一才頃）、形式的操作期（十二才頃～成人）に整理した。子どもは乳児期に欲求を伝えるために言葉にならない喃語を発し、母乳を与える母親や近親の愛着対象の言葉を模倣し、一才後半から二才にかけて言葉の数も操作も爆発的に充実させる。以後、村田孝次によれば、前操作期には「表象が発生し、象徴的な行動が発生してくる。〈意味するもの〉と〈意味されるもの〉の関係が生まれ、言語が思考に介入し始める。概念化が進み、推理も生じるが、なお知覚に支配されていて直観的である。」、具体的操作期には、「具体的に理解できるものは、論理的操作を使って思考する。（略）以前のように知覚に惑わされることも少なくなる。しかし具体的な対象を離れると論理的に思考することができない。」、形式的操作期には、「命題に対して論理的操作を加える。結果が現実と矛盾してもかまわない。典型的なものとしては、科学における仮説検証のための演繹的手続きがある。」（『児童心理学入門』）とされる。

日本の小学校の学童期は、そうした具体的操作に習熟し形式的操作へと移行する時期に当たる。

その学童期の言葉の発達において、岡本夏木は「一次のことば」と「二次のことば」の關係に注目した。「一次のことば」の特徴は、①「相手との一対一の対面対話的關係の中で機能する。」、②「相手が、自分とよく知り合う特定の親しい人である。」、③「話のテーマが具体的に、その対話場面の中にあることがらか、または直接それに関係するテーマである。」、④「コミュニケーションの内容が、ことばの文脈だけでなく、場面（状況）の文脈の支えによって伝わる。」ことにある。一方、「二次のことば」の特徴は、①「話し手自身が話のプロットや展開を自己設定し、たえず自分でモニタリングしてゆかなければならない。」、②「聞き手として不特定多数の一般者（抽象化された聞き手）を想定して話さなければならぬ。」、③「話のテーマが言語活動が営まれる場とは離れた事象や、抽象的な事象を扱うのが普通である。」、④「一次のことばで可能であったような状況（場面）の文脈を援用することはできず、ことばの文脈のみにたよらなければならぬ。」、⑤「一次の言葉は話しことばよりなるが、二次のことばでは、話しことばだけでなく「書きことば」が加わる。」（『児童心理』）。二次のことばの要点は、「話し手自身が話のプロットや展開を自己設定」する自律的な操作であり、重ねて、ようやく習熟した話し言葉の他に書きことばにも習熟しなければならないことにある。かつ岡本は、社会的に自律したとしても、思考や言葉において具体的操作と形式的操作を兼ねなければならないと説いた。拙稿では、具体的操作から形式的操作への移行は、近親者への愛着から社会的な自律への移行と併走すると考えた。

学童期以前の子どもの言葉を『おひさまのかから』から抜き出せば、「（パンツはなくて／どうするの？）／しゅんぺい／かえるになる」（「パ

ンツ」3才・男)とか、「「せきぐち はなこです」／(どうしたの?)／いまね でんしゃがね／「だれっかな だれっかな?」って／きいていったんだもの」(「電車とおはなし」4才・女)と語られ、無邪気で感動的だとされる。前者は動物と人間の未分化なアニミズムの状態にあり、やがて「蛙みたいに」と比喩へと分化するのだろう。後者は物の音と人の声が未分化なまま、すべての音を言葉(意味するもの)と思いなしてメッセージ(意味されるもの)を受け取ろうとしているが、やがて「ガッタンゴットン」という擬音(オノマトペ)へと分化するのだろう。大人の常識では人間と蛙や電車が同一化されることはあり得ない。その思いがけない自由な感性が新鮮で感動的に受け止められるのであろう。自己中心性とも呼ばれる、その自己と対象の自由な同一化から、比喩や擬音を操作して自己を分化する作業は自律の第一歩である。ただ、学童期以前の子どもには話し言葉を書き言葉に分化することはできない。いずれの作品も、母親などの愛着対象が文字化したものである。

その後の、学童期の言葉の発達を『コボたち詩集』で確認する。愛着対象から切り離された小学校での生活は、子どもに緊張を強いるものである。低学年ではまだ両親や祖父母や兄弟姉妹についての作品が多いが、教師が愛着対象を代行することが多くなる。

①おかあさんがすわっているとき／さっさとひざをとりにいけます／おとうとと とりやっこします／さっさとあたまをのせます／やわらかくて ふかふかで／ざぶとんみたいです／ねむりそうになります／わたしは ネコみたいになります／おかあさんのひざ だいすき

(「おかあさんのひざ」1年・女、B)

②先生に／インタビューしました。／「なにがですか」／と、いいました。／いきなり／先生は／「わったっしーは、さそりぎのおんなー」／といって／マイクをよこどりして／おどりました。／ぼくは

／どひゃっ／と、おもいました。／おたんじょうびだからはりきっているなあ／と、おもいました。

(「さそりぎのおんな」1年・男、B)

いずれもほとんどひらがな書きでたどたどしいが、それぞれに愛着の程を文字化している。①では「ふかふか」というオノマトペと「ネコみたい」という比喩が使われ、②では「どひゃっ」としか表せなかった心情を「おたんじょうびだからはりきっているなあ」と説明し直している。言葉の操作の模索はこのような細部に息づいている。やがて、子どもは言葉を操作しながら関心のありどころや自己像(アイデンティティ)の説明を模索する。

③しゅりけん／ふく／ぼうし／なかま／やろうども／ぼくは／たいいくのじかん／にんじやになつた／かっこいいぜ

(「にんじや」1年・男、B)

④転校生が／ひっこしてきた日／給食の時 ないていた／ぼくが／「どうしてなくの」／と聞いたら／浜島俊広くんが／「名古屋のこを／思いだすの」／といった／ぼくが転校したら／ぼくも泣くかなあ／そして／一週間たって／すこしなまいきになりました

(「転校生」4年・男、A)

⑤お父さんに／「私が、産まれる前に考えてた名前って何」／ってきいてみた／すると／「ひなの」／っていった／今の名前は「あやな」／なのに／産まれる前は「ひなの」／「ひなの」だった／今は、いったい／どうなってるんだらう／アダナがかわってるのかな／せいかくはどうだらう／いろんな事を知りたい／だから、一日だけでもいいから／「市橋ひなの」になってみたい／世界にもう一人／私がいるなら・・・

(「私のもう一つの名前」5年・女、B)

⑥「どうしよう・・・」／家に忘れものをしてしまった／あなたなら「それなら忘れましていいばい」と言うだろう／でも私には言えない／失敗がこわいから／うそをつこうか／そうしよう／でも／もう少し考えよう／時計のはりは、まだ少しも動いてない／私は今まで何個のうそをつき、忘れてきたのだろう／人の目をおそれ／うわさにならぬよう注意し／大人の目をきにし／いい自分をえんじる／（八行略）／でも／でも／このままの自分でいたくない／だから勇気を出して／言う／「忘れまして」／言えた／時計のはりは授業が始まることを知らせてた／自分に正直になるってすがすがしい／私は信じてる／また次も正直になれるって

〔強く〕6年・女、『朝日新聞』岐阜版、平28・12・22

子どもは愛着対象から切り離され、学校の友達関係の中で生活する。中学年頃には近親者や教師の目の届かない所で小さな集団を作り、自分の立ち位置を模索するようで、「十才の壁」とか「ギャングエイジ」と呼ばれている。その背景には、「おとなへの全面的な依存から脱して、独立した自律的自己を確立する過程において、子どもはまず自分たちだけの仲間集団として独立しようとする。そこでは規範を自分たちの力で作り、おとなの手は直接借りずにメンバー全員でそれを守っていくとする。」（『児童心理』^①）という事情があるようだ。③はその早い事例だがメンバーとの関係はまだ記述されていない。④になると転校生に声をかけて仲良くなったらしいが、慣れてくると「なまいき」になったと記述されている。その悪ぶった価値判断にはギャングエイジの面目がかがわれる。いずれも男子の作品であるが、女子であれば交換日記や一人での空想を好み始めるのだろう。⑤のように「もう一人」の自分に思いを馳せることもあるだろうし、そのことは自己像を考える契機にもなる。⑥はそうしたもう一人の自分との対話を対話劇として構成するまでに、

言葉の操作を模索した結果であり、「自分をえんじる」ことにも気づいている。子どもはこうした対話劇を無意識のうちに繰り返しながら、いわゆる自我を形成してゆくはずである。

高学年になると社会での自律を目指して、意見を発表したり作文を書いたり、形式的操作を求められる機会が増える。それは論理的で科学的な操作であるが、感性に愛着しながら自律的であろうとする文学的な操作も重要である。高学年の児童詩は理屈っぽいとか技術的だとか見られがちだが、子どもの言葉の操作が科学的な作文と文学的な詩に分岐する時期を迎えているのである。『コボたち詩集』の科学的な操作と文学的な操作を示す作品を見る。

⑦ウシは／大きく口を開けて鳴く／これから鳴くぞと／いう感じで／ウシはななめ上を向いた／そして あくびをするように／大きく口を開けた／はらの中から／おしだすように／シーモォー／と鳴いた／直径十センチ以上の／口になる／口の中をのぞくと／のどもいっぱいに大きく／開いていた

〔ウシの鳴き方〕5年・男、A

⑧父が母に／おせっきょうをいっていた／ぼんやり外を見ていた母／わたしは／そっと母によりそって／「おかあさんの手 あったかいね」／といった／外は雪だ

〔雪の日〕6年・女、A

⑦では牛が「大きく口を開けて鳴く」様子を観察した何気ない詩であるが、観察者は登場せず、最後まで客観的に記している。「ななめ上」や「直径十センチ以上」という科学的とも言える用語を用い、何より「鳴き方」という抽象的な題名が注目される。「いう感じ」や「ように」とは、観察者の心情を暗示する比喩というより、観察されるものの目的を推定する表現なのであろう。科学的な報告に近い。⑧でも父と母の両

方の様子を冷静に観察し、父はひどいとか母はかわいそうだという心情表現は避けている。しかし、「母によりそって」には身体的かつ心情的な寄りそいが重ねられ、「おかあさんの手 あったかいね」も、雪の外景と対照させながら、母への同情が重ねられている。しかも、「ぼんやり」「そっと」といった副詞もしめやかな情調を喚起し、作品に統一感を与えている。過不足なく切り詰めた表現において、文学的な詩に近い。最後の一行も見事で、教師の指導も推察される。⑧や後に触れる⑩は『日本の子ども』の詩21岐阜^⑧にも採録され、作品の末尾にそれぞれ指導教員名が付記されている。児童詩が学校を磁場としている以上、文学的な感性と技術を育むために字句や改行などを指導することは重要である。⑧でも詩としての核心を活かすための指導が行われたのであろう。

そもそも、『コボたち詩集』を編集発行した「コボたちつづり方教室」は、一九一〇年代に盛んになった「生活綴り方教育」に淵源を持っている。『日本の子ども』の詩21の「あとがき―岐阜県の児童詩指導の歩み」に拠れば、戦後の一九五二年に第一回作文教育研究全国協議会が中津川市で開催されるなど、岐阜県でも中津川・恵那地区を中心に作文教育が盛んに行われた。五九年に岐阜県作文教育協議会が設立され、紆余曲折を経て、七二年に児童文学雑誌『コボたち』が創刊されたのである。雑誌は休刊したが、児童詩のコンクールの方が続いていることは興味深い。一般に「綴り方」は日常生活を見つめる作文教育を念頭に、児童詩は低学年の子どもが高学年の作文に向かう簡便な手段として扱われ、その分だけその時期特有の無邪気な姿が「童心」として許容され強要されてきたかもしれない。しかし、純粹無垢と日常生活の枠から飛躍しようとする想像力も、子どもと教師と学級の相互触発の中で育くむ必要がある。児童詩の指導の実践について、岡本博文は『児童詩教育と学校経営』^⑨でこんな実践を報告した。3年生になっても「せんせおかおまる はなさ

かく めとうや くちちやい」(先生顔丸、鼻三角、目象や、口小さい)ぐらいにしか文字を書かない、いたずら者のNくんが詩だと言って、「せんせい ぼく おなかいたいのや なんてやるね せんせい どうおもう」と口頭で発表したものを、学級の「一枚文集」に文字化して載せた。すると一年のうちに、「そうしきのくるまがくる／はこの中で／手をあわせてるかあちゃん／目をつむって／白いきものをきてる かあちゃん／くるまのなかへはいった／かあちゃん／くるまのなか くらいやるうな」と書くまでになり、それを受けて「Nくん、あそぼうよ」と題した一枚文集には、同級生の五編が収載された。「一枚文集」を学級で共有するまでの過程は「推考指導」と呼ばれ、岡本は『生きた児童詩教育』^⑩で指導の詳細を具体的に紹介した。それを実践するには手間暇を必要とする。それでも、思考や言葉の発達にとどまらず、学級経営のために児童詩教育を活用したい。

二、『コボたち詩集』に見る風土的な自己像

以上のように、岐阜県の児童詩も全国的な児童詩における言葉の発達と同様の軌跡を示している。以下には、全国から作品を集めた『小学生詩の本』(Cと記する。三三六篇)と対照しながら、『コボたち詩集』A+B二二篇から岐阜県の児童詩の特徴を見ることにする。いずれも編者によって選ばれた作品であり、子ども全体の心理をそのまま反映したものではないにしても、言葉の発達において同様の軌跡を示しているのであれば、特徴を判断することもできるだろう。また、Cは一九六九年以前の作品を集め、A+Bは一九七五年以降の作品を集め、同時代の児童詩を対照することにはならないが、左に示す主題の五分類が対照には便利であり、結果的にA+Bの方が後代の現代化を反映することにはな

を媒介に、「水どうやどうもつくる」とか「二千万年前」や「おきなわに行」く夢を語っているが、社会的視点は弱い。また、どちらの夢も「おじさん」や「おばあちゃん」との関係性において場面化されている。場面化とは具体的操作であり、Cの場合はいずれも、仮説的で形式的操作である。こうした『コボたち詩集』における「夢」の場面化への傾斜は、「家族」の主題への傾斜と類縁的である。「夢」を主題にする作品が少ないのではなく、「家族」や「学校」に融合されていたのである。⑨⑩や⑤の他に、「トンボのめがね」(1年・女、A)、「ビー玉のふしぎ」(2年・男、B)、「ふしぎなビー玉の世界」(3年・女、B)を、豊かな想像力に注目して「夢」に分類しておいた。

子どもは中高学年になれば自己像を仮説的に模索し始めるが、その様子と場面性との関係を見てみる。Cの場合、「ぼくはベエゴマをやりにくて／むずむずしている／先生はいわれた——ブレーキのきかない子はだめだ。／(八行略)／みんな 抵抗に負けるな。／抵抗なんか つきとばしていこう。／ぼくの心は、そういつている。／(三行略)」「(ベエゴマ)5年・男」とか、「わたしは リンカーンにあった。／そして、／ひげをそってあげた。／(九行略)／それは わたしの小さな／想像のへやの中のできごとだった。／小さな、とびらをあげると、／そのへやでは いろんなことでもできるし、／どんな人にもあえる。／(二行略)」「(ひみつのへや)5年・女」とか、「わたしの組に、ユトリロの絵が／かかっている。／(三行略)／広い空の下を／女の人と男の人が／かたをならべて歩いている絵だ。／(十行略)／わたしも／この絵のように、ユトリロのように／広い、美しい心を／持たたい。」「(ユトリロの絵)6年男」という形で自己像を模索している。「抵抗に負け」ないとか「広い、美しい心を／持たたい」といった自己像は教室という場面から触発されたとしても、作品中には自分しか登場しない。さらに

「想像のへやの中でできごと」に場面性はなく、一人の「ひみつ」として自己像を愛着者から離れて模索している。それに対して、『コボたち詩集』の場合を並べる。

⑪わたしの家は おとうふ屋だ／わたしたちのまだ／ねているころ／おとうさんは 暗い朝をむかえる／(六行略)／六時半ごろ わたしは 仕事場の戸を／ガラッとあけ／「おはよう」／と 声をかける／仕事場の／熱い空気が ムッと出てくる／おとうさんは 短く／「おはよ」／といって 仕事をはじめ／服をぬぎ はだかで／半ズボンに まえかけをしている／あせを出し／しんけんな顔／ひとつのおとうふでも／命がけで作っているように見える／(五行略)

〔朝の仕事〕5年・女、A)

⑫「家、建てかえるぞ」／とじいちゃんが大きな声で言った。／六月下旬からなんだか、あわただしかった／僕が十一年間住んでいた家だ／家がこわされる日がやってきた／学校で勉強をしても落ち着かない／(九行略)／家に帰ると屋根が無い／家も半分壊れてた／じいちゃんばあちゃんは、／壊されていく家を静かに見ている／「こわされるな」／と七十四歳になるじいちゃんがぼつんと言った／七人家族で一番長くこの家に住んでいた歴史があるもんな／生まれてからずっとこの家で生活していたって／おばあちゃんが、教えてくれた／「さびしいな」／と肩を落とすじいちゃん／さら地になった／九月三十日／建前の日／そこには樹齢九十年のひのきの大黒柱／ひのきの恵比寿柱／じいちゃんが丹精込めて育てた木だ／どの木も、どっしり建っていた／じいちゃんばあはうれしそうに僕の家を自まをしていた／僕もみんなも楽しみでしかたなかった／家族みんなが歌ったり、お酒をのんだ／新しい歴史が始まる二村家

〔新しい歴史が始まる〕6年・男、B)

⑬二〇〇八年、三月／この日和田小が、閉校になる／一三五年という、長い歴史に幕がおりる／私は、たった一人の六年生だから／日和田小学校の最後の卒業生となる／卒業名簿には、父の名前もあった／（六行略）／今までに、日和田小を卒業された人たちの／いろんな思いや願いが／ぐいぐいと／私の肩にのっかってくるように感じる／私が、なりたくなかったのではないけど／「日和田小学校最後の卒業生」という呼び名は／ずうっと、私についてくるだろう／責任の重さを感じる／それに負けないで／しっかりと生きていけるだろう

（最後の卒業生）6年・女、B）

⑬を先に見る。作者は「一三五年という、長い歴史」を持つ小学校の「最後の卒業生」としての自分を見つめている。それは、閉校時の「たった一人の六年生」であるという、「なりたくなかったのではない」外在的条件に由来するが、「責任の重さを感じる」と記している以上、自己像（アイデンティティ）として引き受けたことになる。多くの卒業生の中には「父の名前」もあり、目に見えない「いろんな思いや願い」を「歴史」という概念に抽象化している。その肩の荷は小学六年生には重いが、外在的に訪れた自己像形成の典型である。三年生ですでに「ぼくの家は、三代つづく太この家です／ぼくの太この先生はお父さんです」と始め、「これからもいっぱい練習して／四代目をめざしたいです／下呂の町を太こで元気にしたいです」（「たいこ」3年・男、B）と結んだものもある。

それに対して⑪⑫では、内在的に訪れた自己像形成を描いている。⑫では、「ひとつのおとうふでも／命がけで作っているように見える」父の仕事ぶりへの尊敬が仕事の描写から伝わり、それを通じて、家＝父＝私という自己像を、言明せずに確認している。⑬では、家の建て替えの

経緯を描きながら、じいちゃんの「生まれてからずっと」の七十四年と僕が「住んでいた」十一年の「歴史」と、二村家の「新しい歴史」を重ねながら、自己像を確認している。他にも二篇、「八年間の思い出」（3年・男、B）と「家こわし」（4年・男、A）で家の建て替えが描かれている。3年生の場合、冒頭に「ぼくが八年間を過ごした家がこわされた／楽しい思い出や悲しい思い出が／たくさんつまった家が／目の前でこわれていった／ぼくの心に穴があいて／その穴から悲しい風がふいていた／ぼくは頭の中で／「うれしいな」という言葉を思い浮かべた／あと二ヶ月もすれば／新しい家でくらせるんだと思った／悲しい風とうれしい風がこうごにふいてきた」と描かれ、「時間がたつにつれて／「なんだだろう」／という気持ち」も動くが、その「時間」は「歴史」という認識に発展していない。4年生の場合には、末尾に「ぼくの家のおれきが／はいになってしまったんやな」と描かれている。自己像は「思い出」という、目に見える外在的な空間の中でより、目に見えない内在的な時間の蓄積の中で育まれるようだ。そうした操作は、具体的な世界から仮説的に抽象され、「秘密」「自分」「世界」「時間」「歴史」といったキーワードにおいて、中学年頃に始動するようだ。

『コボたち詩集』の場合、自己像の形成も家族や風土への愛着によって育まれているようだ。そのような中で、⑫のような家壊し、地鎮祭、上棟式などの風習は現在も全国的に残っているが、それを通じて自己像形成を描いた作品は、『小学校詩の本』三三六篇にも『おひさまのかけら』二二七篇（未就学児七一、小学生一五四、中学生二篇）にも『日本児童詩歳時記』一九三八篇にも見られない。家とは自己像形成の磁場であり、Cにあった「ひみつのへや」のような、自分の個室が描かれれば、より内面的な自己像形成になるが、それは一例もない。岐阜県は古来森林に恵まれ、「樹齢九十年のひのき」でできた家屋に三世代や四世

代が暮らす家庭環境が身近にあり、『コボたち詩集』における自己像形成はそうした風土に由来したのである。逆に、例えばビルに囲まれ交通網が発達し、仕事や生活が効率的に抽象化された社会を反映する作品は多くない。

⑭お母さんは／ほうもんかんごステーションの／仕事をしています／私が、保育園のころからやっています／もうすぐクリスマス／私にとっては楽しいクリスマスですが／お母さんは、パソコンにとらめっこ／何回もコピーをして／ファイルにカードをとじている／「だれにだすの」／と気になって聞いてみると／「なくなったかんじゃさんの家族にわたすんだよ」／と、しずかに言いました／仕事がおそくなる日は／かんじゃさんが、なくなった日です／（八行略）／お母さんは／なくなったかんじゃさんにとっての／サンタさんなんだ／クリスマスカード／天国にもとどくといふ

⑮（十行略）／／夕食のあと／テレビニュースが／「きょうは 夕方から あいにくの雨ですね・・・」／きいていたおとうさんが／「恵みの雨と、いわなければあかんやんか、なあ」／おじいちゃんも／「そうやそうや」／アナウンサーに文句をつけた。／「あのアナウンサーあかんなあ。／都会のことしか考えとらんで・・・」／ぼくもいいながら／重いポンプを 一輪車にのせて／坂をのぼっていく おじいちゃんの／おでこのあせと／カリカリにやけた サトイモ畑にまく、／ババババババという／水の音を思い出した。／／（四行略）

⑯「めぐみの雨」5年・男、B）
⑭では訪問看護の仕事が取り上げられ、クリスマスの賑わいと患者さんの死と、そして「おばあちゃんと、きょうだい三人」で母の帰りを待

つ家庭環境が描かれている。⑮では都会からのテレビニュースが「あいにくの雨」と伝えたが、農家にとっては「恵みの雨」なのだという、社会を相対的に見る目が描かれている。しかし、いずれも社会的な目が、むしろ母や祖父の仕事の苦勞を描く一環として機能している。風土への愛着の中で自己像（アイデンティティ）を形成していることが、『コボたち詩集』の児童詩の最大の特徴であろう。それは、愛着と自律の天秤が前者に少し傾いているということでもある。子どもがやがて社会で自律するために、社会的な目を適切に持つことは必要である。六年生の作品に一編、社会的な目が適切に発揮されたものが見られるが、それは次節で取り上げる。

三、ある経年的な成長

『コボたち詩集』は学年毎に配列されているので、それを活用した鑑賞も可能である。前節で「夢」の例としてあげた「トンボのめがね」（1年・女、A）、「ビー玉のふしぎ」（2年・男、B）、「ふしぎなビー玉の世界」（3年・女、B）を対照するのも、各学年にわたって多い自然観察の作品を対照するのも興味深いだろう。後者の例を挙げてみる。

⑯くものすにばったがひっかかっていた／うえのほうからくもがくものいにつかまっておりてきた／しーんとしておりてきた／ばったにくものいとをまきだした／りょうあしをくものすにひっかけて／じぶんもまわりながら／ばったにいとをまきだした／ばったはうごかなかった／ばったはめだけでこちをみていた／ばったのめがすぐ大きかった／いたそうだった／あつというまにばったはしろいかたまりになった／くもはまきおわるまでしーんとしていた／ばったはかわいそうだけれど／くものすにくつついたしろいかたまりはともきれいだ

〔くもとばった〕1年・男、B)

①朝 児童げんかん近くの木で／くもの巣を見つけた／給食のナフキンサイズで／たて糸が1mm間かくで／まるでくもの巣のカーテン／ふうわりやわらかなカーテン／そっと手でふれようとした時／はしっこに青虫のような／緑の小さな幼虫が／たった一本の細い糸に／首をひっかけてられて／ピクリとカーテンをゆらした／私は思わず手を引き込め／教室へ走り込んだ／その日は一日中／私の頭の中にも／くもの巣がはったみたいだった

〔くもの巣のカーテン〕4年・女、B)

いずれも集中した観察によるが、⑩では蜘蛛とバッタの動きの一つ一つに、⑪では蜘蛛の巣にかかった幼虫の「ピクリとカーテンをゆらした」様子に焦点を合わせている。⑫が低学年男子、⑬が中学年女子の作品であり、男子の行動的な反応と女子の心情的な反応の対照とも言えるし、低学年の「た」止めの断片的な列挙に対し、中学年の「まるでくもの巣のカーテン」とか「私の頭の中にも／くもの巣がはったみたい」といった比喩の使用において、言葉の操作の発達を見ることが出来る。

同じように、同じ作者の経年的な成長を見ることが出来る。例えばAでは、4年時に「二千万年前の／有孔虫の化石」に思いを馳せた⑤の作者は、がんで亡くなった祖父を、6年時に「きゅうくつそうに箱の中に入っている／三角きんをして／やせ細った黄色い顔の中で／口だけを／大きくがばっと開けていた／父がかたをおしながら／「最後のお別れだよ」といった／やせ細ったおじいちゃんに／たくさんのキクの花は重いのではないかしら／わたしはそうと／白いキクの花を足元に置いた」(「おじいちゃんが死んだ」)と描いた。冷静な観察と「そうと／白いキクの花を足元に置」く優しさが融合している。⑤で星砂をくれたのは祖母で、優しい家族に包まれて空想と現実を融合できる個性が見え

てくる。⑬をめぐって家の解体の題材について言及したが、その中の「家こわし」の4年の作者は、1年時に「ぼくが／あるけるようになったとき／げんかんのしょうじを／びりびりにやぶってしまった／うちのなか／まるみえになってこまった／かあちゃんが／「たかぼうはわるでっちゃん」といったやってー／(九行略)／もう／一ねんせいになったんやでわるでっちはやめるからね」(「ぼくの小さいとき」)と書き、ともに家の一部を壊した偶然も興味深いが、三年を隔てて自分の歴史と家の歴史を見つめたことになる。Bでは、「けっこんきねん日」(1年)「最後の運動会」(6年)を書いた女子と、「八年間の思い出」(3年)「妹の中池合宿」(6年)を書いた男子と、「川のにおい」(5年)「川の声」(6年)を書いた女子Wなどの例がある。

特にWさんの作品は、『コボたち詩集』に二篇しか掲載されていないが、コボたち詩コンクールで1、2、3、5、6年時に特選に入賞している。いずれも長良川支流の伊自良川を題材にしている、児童詩における経年的な成長を見るには最適であり、全て紹介する。

⑬「あ にじだ」／学校がえり／ゆみちゃんがむこうの山を／ゆびさした／「どこどこ」／「あ ほんとうだ」／みんなあつまってきた／にじは山のうえから空たかくのぼって／くものところできれていた／はたけのほうにいくとなくなってしまう／いじら川のていぼうにあがると／まどうすくのこっている／きえていくにじを／みんなで見ながらかえった

〔にじ〕1年

⑭学校を出て二つ目の橋まできたら／かさが きゅうに ぼつぼつと いった／「かたい雨が ふってきたよ」／かさをしっかりとにぎって／なっちゃんと くっついてあるいた／「とんできそうや」／「もうあるけんで かさたも」／ふたり しゃがんでかたまった

／いじら川は まっ黒になって／ていぼうの下から 雨がふいてきた／つめたくて 足がしびれた／わたしは こぼん草をつんで／川になげた／「かみさま あらしをとめて下さい」／なっちゃんもなげた／かわりばんこに なげたら／雨はすこしやんできた／「やったあ いまのうち」／走りだしたら くつの先から／びゅうと水が出た／なっちゃんの 長ぐつは／じょほんと 上から出た

〔雨の中〕2年

⑳ ていぼうの草むらを歩いたら／ぴゅいんと何かとび出した／右ぴゅん 左ぴゅん／くつより 先に先に／ぎざぎざに わかれてとぶんだよ／歩く方向が わかるのかな／しゃがんで 草をじいっとにらんだ／光る目玉が こつちをにらんだ／大きな口は トノサマバッタだ／ふつうのトノサマより黒くて小さいから／むれのバッタだよ／つかまえようかと思っただけで／足のむきをちよっとずつかえ／おしりをさげると／ぴいゅっとにげた／／息をとめて そうつとそうつと／自転車のところにもどり／立ちこぎで 草の中につこんだ／オンブバッタが わかれて低くとんだ／耳のそばを ぴゅいんと音が通った／Tシャツのおなかにもパチッとあたった／すきとおった羽が 目の前でひろがって／すごく大きくて こわかったよ／／帰りに みきちゃんをさそって／もう一度行くから／それまでないしょにしたいね

〔ひみつ〕4年

㉑ 伊自良川に／魚採りのピンをかけた／橋の上から見ていると／小さな魚が おうぎ形の群になって／ピンのエサに向かって泳いで来る／なにかかかかな／夜まで待って たもでピンをすくった／ううう重い たもがあがらん／まっ黒い流れに 顔をつっこんでみた／大きな石が入ってる と思ったとたん／にゅっくり ぐぐぐざっ／石

が動いて 手をひっかいた／長い顔がひょうっと出た／うわあっころびそうになった／スッポン？ ちがうちがう／カメだ でっかい石ガメだっ／バケツにも入らない／つめが強くて いたくて持てない／タオルにくるんで だっこで家まで走った／／たらいをさがそうと 下に置いたら／向きを変えて ぬっくぬっく／一直線に歩いていく／何回もどしても 同じ方々にげる／伊自良川の方向だ／／こんなに大きくなるまで／ずっと住んでいたんだもんね／また タオルにくるんで／返しに行った／川の近くまで来たら／手足をバタパタ 急にあげた／川のにおいが わかるんだね

〔川のにおい〕5年

㉒ 伊自良川の石にすわると／いろんな音が降ってくる／遠く近く キビタキやセキレイのひびき／シュシャツ エメラルドの直線は／カワセミの飛び込み／風の通り道は 木の葉がさわいで／教えてくれる／／伊自良川にもぐると／いろんな音が見える／／とんぼがつんつく 水をついついてるおしり／後ろ向きに流されていくマガモの／あわてた水かき／近づいて向きを変えた オイカワの群れ／目が合うと 砂に頭をつっこんだカマツカ／石のかげでひれをバタバタイそがしく／卵に酸素を送っているドンコの父さん／流水の間にしがみついているイシガメ／足の裏から 湧き水が押し上げてくる／水草が 光が ゆれてる／川の音が 聞こえる／／三か月で／私がつわっていた石は／コンクリートの堤になった／風を知らせる木は 切りたおされ／ダンブの通り道になった／川の底をさらうショベルカーの音が／地面をゆらした／川の音が 聞こえる

〔川の声〕6年

1年時の㉔では、「ゆみちゃん」や「みんな」と下校する途中に虹が立った場面を描き、「いじら川」は畑から堤防に上がった時に言及され

るにとどまる。⑮では、「なっちゃん」と下校する途中に激しい雨に巻き込まれた場面を描き、「いじら川」は、「まっ黒になって／ていぼうの下から 雨がふいてきた」と、雨の激しさを際立たせる添景として描かれている。雨が小やみになり走りだすと二人の長靴の口から水が溢れ出た末尾はすでに巧みである。⑯では、おそらく登校する途中に、堤防の草むらを歩くとトノサマバツが飛び出し、自転車で突っ込むとオンブバツが飛び出した場面を描いた。その恐怖と興奮の「ないしょ」の体験を、下校時に「みきちゃん」と再体験しようとしている。ここで伊自良川の名前は登場しないが、友だちと共有したい体験の大事な舞台として顕在化した。しかも、その大事な体験を「ないしょ」の「ひみつ」にしたいような、大事な友だちには共感してもらいたいような心境にある。つまり、自分にとっての大事なものに気づき、そういうものを大事だと思う自分というものに気づき、自己像を育み始めているのである。4年時という「ギャングエイジ」にふさわしい。

5年時の⑰では、登校や下校にかかわらず一人で、「伊自良川」で「魚採り」を楽しもうとしている。夜まで待つと「でっかい石ガメ」がかかり、家まで持ち帰ったが、地面に置くと「伊自良川の方向」に逃げ出す。後半の「一直線」に「何回」も「同じ方向にげる」ことから、石ガメには「川のおい」が分かることを発見したことが主題と考えてよいが、前半の石ガメがかかった場面の描写には臨場感がある。それには「うう」「にゅっく」「ぐぐざっ」というオノマトペ（後半にも「ぬっくぬっく」「バタバタ」や「たもがあがらん」と思ったたん「ちがうちがう」「石ガメだっ」という口語体も寄与している。心情に合う文体を自ら操作しているのである。オノマトペはすでに⑮で長靴から水が出る様子を「びゅう」「じょほん」と描き、⑯でもバツが飛び出す様子を「びゅいん」「ぴゅん」「ぴいゅっ」「パチッ」と破裂音を用

いて描いている。オノマトペとは微妙な感性を、名詞や形容詞に抽象化して分節するのと逆の、それに逆行しようとする表現技術であり、愛着のための言葉である。「ひみつ」の大事な体験を観念的に抽象するのはなく、生々しい具体のまま表現したことになる。

「伊自良川」への愛着はこのように高揚したが、6年時に思いがけない事件が起きる。⑱の第一連では、「伊自良川の石にすわると／いろいろな音が降ってくる」。「キビタキやセキレイ」のさえずりや「カワセミ」が川に飛び込む音。第二連では、「伊自良川にもぐると／いろいろな音が見える」。水面にはとんぼやマガモ、水中にはオイカワ、カマツカ、ドンコ、イシガメ、そして水草。ところが、川の改修工事が始まり、三ヶ月の間に「コンクリートの堤」ができ、「木は 切りたおされ」、ダンブが通り、ショベルカーが川底をさらっている。第一連と第二連の末尾は同じ「川の音が 聞こえる」に調整されているが、第二連の音が川の飲みの声であるのに対し、第三連の音は川の悲しみの声である。第二連の音が具体的な「いろいろな音」であるのに対し、第三連の音は悲しみを共有する作者の、擬人的に抽象化された心の声でもある。第一連の「いろいろな音」は聴覚的で第二連の「いろいろな音」は視覚的で、共感覚化が進行している。自然破壊への批判が主題ではあるが、共感覚化や擬人法を用いて愛着と自律とが融合し、悲痛な叫びになっている。「風」や「光」の使用も抽象化の一環である。⑳から㉑までの行末は用言止めが多かったのに、㉒では体言止めが多い。これも一気に訪れた形式的操作の一環だろう。作者はこの事件を思索し言語化することで社会を見つめる視点を獲得し、社会的自律に踏み出したことになる。

Wさんは、第四十回「コボたち詩コンクール」表彰式（二〇一五・二・一五）で「川の声」と題して子どもや保護者にお話をされ、今日でも自然に興味を持ち続けているに至る、二つの転機について言及した。作文

や詩は苦手だったが、好きなことを書いていいよと言われて、伊自良川について書き始めた。第一の転機は、愛知県の矢作川の近くで生まれ育った作家阿部夏丸の本が好きで、二年時に講演会に出かけて知り合い、二年後には伊自良川に来ていただいたこと。第二の転機は、六年時に川の改修工事が始まったこと。川で出会った生き物の名前を紙に全部書き出して工事を止めて下さいと訴えたが、工事は続いた。そこで②「川の声」を徹夜で書き、締め切りの日の夕方に新聞社に直接持ち込んだとのこと。「風を知らせる木」とはWさんが神様の木と呼んでいた木のこころらしく、大きな木はランドマークのように世界の中心を象徴する。川の生き物の名前が列挙されていることを考え合わせると、②は第一連で全てが均し並みに肯定される神話的な世界を描き、第二連で「風を知らせる木」を中心とする世界に危機が訪れた伝説の世界を描いているとも言える。①⑨では「こぼん草」を川に投じて「かみさま あらしをとめて下さい」と祈っていた。好きなもの、大事なものを磁場として、描かれた世界は生動してくる。少なくとも②は自発的に書かれ誰の添削も承けていないようだ。それでも、川や木を媒介している点で、『こぼん草詩集』の特徴である風土的な自己像形成に連なっている。

ところでこうした発見は、経年的に読むことで気づくことができたのである。児童詩を集めた『おひさまのかけら』は主題別に配列され、『小学校詩の本』は学年毎の分冊において主題別に配列されている。それに比べて、『こぼん草詩集』は二冊とも学年毎に配列され、経年的な成長を見やすく、二冊の間の経年的な変化を見ることが出来るだろう。本論では踏み込まなかったが、末尾の資料1を参照して性差の経年的な変化も見ることが出来るだろう。他にも多くの児童詩のアンソロジー^⑫が刊行されている。教師はそれらから思考や言葉の発達段階を見定め、子どもにもそれら（あるいは数篇のアンソロジー）を提示し、詩であろう

と作文であろうと書き始めさせたい。また、発達段階の少しだけ先を行う詩を体験するために、大人が子どものために書いた少年詩を活用することも有用である。例えば、教科書に掲載されている詩はほとんどが少年詩であり、谷川俊太郎や工藤直子や金子みすゞなどの作品が並ぶ。『いま小学生とよみたい70の詩』^⑬（1・2年篇、3・4年篇、5・6年篇）などもある。工藤直子『のはらうた』シリーズから『子どもがつくるのはらうた』シリーズ^⑭も生まれている。

- (1) 日本作文の会編『児童詩教育事典』（百合出版、一九七〇・三）
- (2) 『小学校詩の本』（1年生～6年生の六巻、小峰書店、一九六九・三～一九七一・六／三三六篇）
- (3) 川崎洋編『おひさまのかけら』（中央公論社、二〇〇三・二／二二七篇）。『読売新聞』（一九八二・一・二〇〇一・一二）に掲載された詩の秀作集。重複があるが、同様（一九九四・七～一九九七・八）の秀作集『こどもの詩』（文春新書、二〇〇〇・一〇／一八〇篇）もある。
- (4) 拙稿「児童詩の世界―言葉の発達の視点から―」（『岐阜聖徳学園大学国語国文学』第36号、二〇一七・三）
- (5) 村田孝次『児童心理学入門』（三訂版、培風館、一九九〇・一）
- (6) 岡本夏木『児童心理』（岩波書店、一九九一・一）
- (7) 岡本博文の会編『日本の子ども詩21 岐阜』（岩崎書店、一九八二・九／二〇九篇）
- (8) 日本作文の会編『日本の子ども詩21 岐阜』（岩崎書店、一九八二・九／二〇九篇）
- (9) 岡本博文『児童詩教育と学校経営』（国土社、一九七二・八）
- (10) 岡本博文『生きた児童詩教育』（新評論、一九七八・一一）
- (11) 江口季好編『日本児童詩歳時記』（駒草出版、二〇〇八・四／一九三八篇を十二ヶ月に編集した）
- (12) 全国的なアンソロジーには日本作文の会編『年刊・日本児童生徒作文詩集』（一九五九～二〇一六、五七集）、地域的なアンソロジーには長野県作文教育研究協議会編『しなの子ども詩集』（一九五五～二〇一六、六

三集、高知県児童詩研究会編『やまも 高知県こども詩集』（一九七
七～二〇一七、四一集）などがある。

(13) 水内喜久夫編『いま小学生とよみたい70の詩』（1・2年篇、3・4年
篇、5・6年篇、たんぼ出版、二〇〇一・三）

(14) 工藤直子『のはらうた』シリーズ（六巻、童話屋、一九八四～二〇〇八）。
なお、拙稿に「工藤直子『のはらうた』の世界―子どもの発達の視点か
ら―」（『岐阜聖徳学園大学紀要〈教育学部編〉』第48集、二〇〇九・
二）「工藤直子の文芸様式―昔話・伝説・神話―」（『岐阜聖徳学園大学
国語国文学』第31号、二〇一一・三）がある。

(15) 『子どもがつくるのはらうた』（①②③、童話屋、二〇〇六、七、八）

一年生

1	ワラビとり	男	自然
2	キアゲハ	女	自然
3	イワナつり	男	自然
4	よしのり	女	家族
5	あおやまん	女	家族
6	あたらしいがっこう	男	学校
7	ワラビとり	男	自然
8	でっかいうんこ	男	家族
9	セミのようちゅう	男	自然
10	あかちゃん	男	家族
11	ぼくの小さいとき	男	家族
12	はなかんざし	女	自然
13	トンボのめがね	女	夢
14	おとうさんのあしふみ	男	家族
15	おてがみのおれい	女	家族
16	たろんぼとじろんぼ	女	自然
17	カメ	男	自然
18	しゃんぶ	女	夢
19	わたしだけおよげなかった	女	学校
20	クロ	男	家族
21	ヒマワリ	男	自然
22	こうちょうせんせい	男	学校
23	セミ	女	自然
24	おかあさんのひざ	女	家族
25	およめさんのこと	女	社会
26	日なたぼっこ	女	自然
27	アカトンボ	女	自然
28	ちびカメ みつけた	男	自然
29	おじいちゃん	女	家族

二年生

1	イネはこび	男	家族
2	カブトのよう虫	男	自然
3	みせのこと	女	社会
4	いとこ	女	家族
5	草むしり	男	自然
6	ぼうずあたま	男	学校
7	ばあちゃんのたいいん	男	家族
8	こうさく	男	学校
9	ばあちゃん	男	家族
10	むしめがね	女	自然
11	カニのあかちゃん	男	自然
12	ザリガニのあかちゃん	男	自然
13	ザリガニ	女	自然
14	ウシ	男	自然
15	かたぐるま	女	家族
16	ペンギン	男	自然

小学生詩の本 C

	自然	家族	学校	社会	夢	合計
一年生	24	19	14	-	7	64
二年生	19	16	18	-	6	59
三年生	19	13	12	7	10	61
四年生	10	10	10	8	10	48
五年生	15	13	8	8	11	55
六年生	10	15	9	9	6	49
合 計	97	86	71	32	50	336
%	28.9	25.6	21.1	9.5	14.9	100

三年生

1	コメツキムシ	男	自然
2	ウシの絵	男	自然
3	足くらべ	女	家族
4	ヤギ	女	自然
5	トンネル	男	学校
6	ウシ	男	自然
7	おとうさんのにおい	女	家族
8	おとうさん	男	家族
9	あすかへ	男	家族
10	ぼくのおとうさん	男	家族
11	ヘビ	男	自然
12	おじいちゃんのしゃくし	男	家族

四年生

1	星砂	女	夢
2	手紙	女	家族
3	子ウシ	男	自然
4	セミ	男	自然
5	転校生	男	学校
6	ボンがし	男	社会
7	うられていった子ウシ	男	家族
8	つな登り	女	学校
9	家こわし	男	家族
10	おじいちゃん	女	家族
11	にじ	女	自然
12	おばあちゃんの顔	女	家族

五年生

1	おかあさん	女	家族
2	校長先生	女	学校
3	わたしの兄	女	家族
4	うかい	女	社会
5	乳しぼり	女	社会
6	ホタル	女	自然
7	ウシの鳴き方	男	自然
8	朝の仕事	女	家族
9	イネカリ	女	社会
10	死んだハト	女	自然
11	母のどうまる	男	家族
12	イネカリ	女	社会

六年生

1	雪の日	女	家族
2	みそ汁	女	家族
3	おじいちゃんが死んだ	女	家族
4	お茶もみ	女	社会
5	おとうさん	女	家族
6	おじいさん	女	家族
7	まゆ子	男	家族
8	葉切りをする祖母	女	家族

コボたち詩集 A+B

自然	家族	学校	社会	夢	合計
19	29	9	1	2	60
16	11	12	5	4	48
8	17	3	1	1	30
6	11	6	3	1	27
4	8	4	7	1	24
0	10	9	4	0	23
53	86	43	21	9	212
25	40.6	20.3	9.9	4.2	100

一年生

1	うれしかったこと	女	家族
2	どうして ついてくるの	女	自然
3	カエルのおきゃくさん	男	自然
4	るすばん	女	家族
5	せんせいははんばあがあ	女	学校
6	にんじゃ	男	学校
7	びっくりしたおふろ	男	家族
8	ゆきひろくん	女	家族
9	あめのかず	女	自然
10	あきみつけ	女	自然
11	いいこといいこと	女	家族
12	いととおし	男	家族
13	ねむれないよ	女	家族
14	しゅくだい	男	学校
15	ごめんな、おかあさん	男	家族
16	りょうへい	男	家族
17	かぜ	男	家族
18	くもとばった	男	自然
19	おとうと	男	家族
20	「ほれみんせい」	女	家族
21	おばあちゃんの手	男	家族
22	ぼくのじいちゃん すごいんだぜ	男	家族
23	なおこ	男	家族
24	けっこんきねん日	女	家族
25	けんか	男	学校
26	めだかがきえた	男	学校
27	しんかいのいねかり	女	家族
28	かまきり	女	自然
29	え ら い	女	家族
30	いのちのみず	男	家族
31	さそりぎのおんな	男	学校

二年生

1	風	男	学校
2	ドイツのジャンプー	女	夢
3	ゆうなちゃん	男	学校
4	ビー玉のふしぎ	男	夢
5	きそうま	男	社会
6	ゆずのおふろ	女	家族
7	なべ	男	社会
8	先生のタオル	男	学校
9	となりのせき	女	学校
10	わたしの先生	女	学校
11	いもうと	男	家族
12	しぶがき・お日さまパワーいっぱい	女	自然
13	はやびき	男	学校
14	うし	男	自然
15	しいたけがきらい	男	学校
16	テストで0点とった	男	学校
17	大おばあちゃんのでんち	女	家族
18	クワガタのよう虫	男	自然
19	たまごだ	男	自然
20	ぼくは、つよいとのさまだ	男	学校
21	うなぎ	男	自然
22	心ばいがふえた！	男	学校
23	ししまい	男	家族
24	くつつきばぼ	女	自然
25	広い東ほく	男	社会
26	はつぽん	男	家族
27	地きゅうぎを見たよ	女	社会
28	すすきのジュータン	男	自然
29	おとなになったら	男	夢
30	手紙	男	家族
31	食べられちゃった	男	自然
32	ねん土のくまちゃん	女	夢

三年生

1	先生、社会のまどがあいとるよ	女	学校
2	あやちゃんのランドセル	男	家族
3	かなしい一日	女	家族
4	ふしぎなビー玉の世界	女	夢
5	お兄ちゃんとおふろ	男	家族
6	お母さんのぜん息	女	家族
7	もう忘れんぞ	男	学校
8	お父さんのひげぬき	女	家族
9	おたまじゃくしが生まれた	男	自然
10	八年間の思い出	男	家族
11	へんしんする弟	女	家族
12	楓馬	男	家族
13	くわがたのひみつを見た	男	自然
14	天国にもとどくサンタさん	女	社会
15	お母さんのとこ屋	男	家族
16	一つの命	女	自然
17	たいこ	男	家族
18	妹のとう校	女	家族

四年生

1	おじいちゃんの頭	男	家族
2	クワイチゴ	女	自然
3	地しん	女	自然
4	ここがいいとこや	男	家族
5	くもの巣のカーテン	女	自然
6	やったあ、乗れた	男	学校
7	心のあな	女	家族
8	「一つの花」	男	学校
9	私も行ってみたい	男	社会
10	朝の音	男	社会
11	むちゃくちゃ	男	学校
12	お見まい	男	家族
13	家族	女	家族
14	亡くなったおじいちゃん	男	家族
15	人生を学んだ連合音楽会	男	学校

五年生

1	つえ	女	家族
2	はかまいり	女	家族
3	めぐみの雨	男	社会
4	班がえ	男	学校
5	個人こんだん	男	学校
6	トイレそうじ	男	社会
7	川のにおい	女	自然
8	初めての稲かり	男	学校
9	おばあさんの言葉	女	社会
10	私のもう一つの名前	女	夢
11	わたしの弟	女	家族
12	父の背中	男	家族

六年生

1	牛乳配り	男	社会
2	養護祭	男	学校
3	養護の清ちゃん	女	学校
4	あだ名で	男	学校
5	建司くんのこと	男	学校
6	写生大会	男	学校
7	ばあちゃんの死	男	家族
8	川の声	女	社会
9	電車の一人旅	男	社会
10	歯	男	学校
11	新しい歴史が始まる	男	家族
12	最後の卒業生	女	学校
13	村瀬先生との約束	男	学校
14	最後の運動会	女	学校
15	妹の中池合宿	男	家族